

22. 農学研究科

I	農学研究科の教育目的と特徴	・ ・ ・ ・ 22-2
II	分析項目ごとの水準の判断	・ ・ ・ ・ 22-4
	分析項目 I 教育の実施体制	・ ・ ・ ・ 22-4
	分析項目 II 教育内容	・ ・ ・ ・ 22-11
	分析項目 III 教育方法	・ ・ ・ ・ 22-23
	分析項目 IV 学業の成果	・ ・ ・ ・ 22-28
	分析項目 V 進路・就職の状況	・ ・ ・ 22-35
III	質の向上度の判断	・ ・ ・ ・ 22-40

I 農学研究科の教育目的と特徴

農学研究科は、平成19年4月に自然科学研究科を理学研究科，工学研究科，農学研究科，海事科学研究科及び自然科学系先端融合研究環に改組し発足した。本研究科では，自然科学研究科博士課程（農学系）の前期課程5専攻及び同後期課程3専攻を再編し，博士課程前・後期課程一貫の3専攻（後述）を設置した。以下に，本研究科の教育目的とその特徴について述べる。

（教育研究目的）

本研究科及び自然科学研究科の目的は《資料1，2》のとおりである。

《資料1：自然科学研究科の目的》

自然科学研究科の目的は「学際的な分野を含めた広範な自然科学の諸領域における総合的な発展を図ること」であり，前期課程，後期課程の中心的な教育目標は「次世代を担う人材の育成」であった。前期課程では社会の研究基盤を支える専門性を備えた人材を養成すること，後期課程では高度な研究開発能力を持つ研究者・企業人の養成，留学生の養成，社会人の研究能力の開発などの社会的・国際的貢献を果たすことに教育目標を置いていた。

《資料2：農学研究科の目的》

農学研究科は，自然及び人工生態系の保全を図り，衣食住のもととなる生物資源の生産・管理・利用と開発を通じて人間社会に貢献する「持続共生の科学」をその教育研究上の理念とし，これに基づき，教育研究上の目的を食料・環境・健康生命に代表される農学の諸課題を探究することによって，持続共生社会を構築する高度な技術と知的基盤の創成に貢献するための教育研究を行うこととしている。また，学際性と総合性をビルトインし，独創的な学術研究と科学技術開発を担う，優れた研究者・教育者や指導的役割を担う高度専門職業人など，地域・国際社会で活躍できる人材の育成を目指している。

この目的を達成するため，現行の中期目標では，「幅広く深い教養，専門的・国際的素養と豊かな人間性を兼ね備えた人材を育成する」ことを定めている。

また，上記のような人材を養成するため，専攻共通のコア講義や複数の教員で構成する少人数ゼミ形式の授業科目等に重点をおいた教育課程を編成している。

（組織編成）

本研究科では，上記の目的を実現するために《資料3》のような組織構成をとっている。

《資料3：組織編成》

専攻	講座
食料共生システム学専攻	生産環境工学講座，食料環境経済学講座
資源生命科学専攻	応用動物学講座，応用植物学講座
生命機能科学専攻	応用生命化学講座，農環境生物学講座

（教育の特色）

1. 前期課程教育の特色

- ・コアカリキュラムの設定： 研究科内横断型のコア科目を開講し，自専攻と他専攻各2単位を必修化している。
- ・学際的視点の涵養： 本学の自然科学系4研究科(理学，工学，農学，海事科学)に共

通の授業科目を選択必修科目とし、学際的視点の涵養を図っている。

- ・プログラムコースの設定： 他の自然科学系3研究科と連携したプログラムコース認定制度を設けている。
- ・国際的視野から活躍できるリーダーとなる人材養成： 海外演習や英語特別講義、農業技術英語演習を開講している。
- ・修士学位認定プロセス： 指導教員とともに自専攻及び他専攻の関連教員を加えた指導体制を整備している。

2. 後期課程教育の特色

- ・学際的視点の涵養： 本学の自然科学系4研究科に共通の授業科目と他研究科または他専攻の専門科目を選択とすることによって、学際的視点の涵養を図っている。
- ・博士学位認定プロセス： 前期課程と同様に、指導教員とともに自専攻及び他専攻の関連教員を加えた指導体制を整備している。

3. 前期課程・後期課程に共通した特色

- ・海外の学術交流協定校との教育連携を活用して国際的に活躍できる人材育成を目指しており、英語プレゼンテーション能力に加えて、英語ディベート能力や英語論文作成能力を養成する教育システムの提供や留学生の受け入れ拡大等により、学生に国際レベルの教育環境を提供している。

[想定する関係者とその期待]

本研究科の教育についての関係者は、受験生・在学生及びその家族、修了者及びその雇用者、並びに農学系の学術団体を想定している。これら関係者からの「幅広く深い学識、高度の専門的知識と技術、高い論理的思考能力及び国際的素養を兼ね備えた人材の育成」という期待に応えるべく教育を実施している。

II 分析項目ごとの水準の判断

分析項目 I 教育の実施体制

(1) 観点ごとの分析

観点 基本的組織の編成

(観点に係る状況)

平成 18 年度までは自然科学研究科の教育目標である「次世代を担う人材の育成」を達成するため、博士課程前期課程（農学系）では、《資料 4》に示すように 5 専攻 12 講座体制で教育研究を実施した。また、後期課程では、《資料 5》に示すように 3 専攻 6 講座で教育研究を実施した。

平成 19 年度に発足した本研究科は、「食料・環境・健康生命」に関わる諸問題を総合的に教育研究し、地域・国際社会で活躍できる人材を育成するという目的達成のため、各キーワードに対応した前・後期課程一貫の 3 専攻 6 講座《資料 3 (p 22-2)》の体制で教育研究を実施している。なお、各講座はそれぞれ 3～10 の教育研究分野（総計 45）で構成している。

自然科学研究科（農学系）及び本研究科の学生定員、入学者数の状況は《資料 6～8》のとおりである。平成 18 年度の前期課程（農学系）の定員充足率は、収容定員が 208 人で入学者が 248 人であることから 119.2% であり、後期課程（農学系）の専攻における定員充足率は収容定員が 117 人で入学者が 116 人であることから 99.1% となっている。平成 19 年度の農学研究科前期課程の入学定員が 119 人で入学者数が 143 人であることから充足率は 120.2%、同後期課程の入学定員は 25 人で入学者数が 25 人であり充足率が 100% となっている。すなわち、定員充足率ベースでは、研究科改組による影響はほとんど見られない。前期課程の定員充足率が高いのは、入学辞退者の予測が困難であったことから生じたものであり、今後学生募集を数段階に分けて入学者数の調整を行うことにより適正化する見通しである。

専任教員の配置状況は《資料 9》に示すとおりである。平成 18 年度における専任教員一人当たりの学生数は前期課程（農学系）で 3.22 人、後期課程（農学系）の専攻で 1.51 人と適切な規模になっていることから、教育及び研究指導を行うに当たって大学院設置基準を満たす十分な教員を確保していると言える。

《資料 4》

専攻	講座
応用動物学専攻	応用動物遺伝学講座、動物機能調節学講座
植物資源学専攻	資源植物学講座、園芸資源学講座、食料経済学講座
生物環境制御学専攻	生物環境学講座、植物機能制御学講座、生物制御学講座
生物機能化学専攻	生物機能分子化学講座、生物機能利用化学講座
食料生産環境工学専攻	地域環境工学、バイオシステム工学

《資料 5》

専攻	講座
食料フィールド科学専攻	食料基盤工学講座、食料環境情報講座
生命機構科学専攻	生物機構化学講座
資源生命科学専攻	動物資源開発講座、植物資源開発講座、生物機能開発講座

《資料 6 : 大学院学生定員年次別進行表》

自然科学研究科博士課程前期課程

専攻名	学生定員
数学専攻	18
物理学専攻	20
化学専攻	23
生物学専攻	22
地球惑星科学専攻	21
理学系専攻計	104
建設学専攻	106
電気電子工学専攻	64
機械工学専攻	66
応用化学専攻	63
情報知能工学専攻	74
工学系専攻計	373
応用動物学専攻	18
植物資源学専攻	28
生物環境制御学専攻	22
生物機能化学専攻	21
食料生産環境工学専攻	15
農学系専攻計	104
海事技術マネジメント学専攻	12
海上輸送システム学専攻	16
マリンエンジニアリング専攻	16
海事系専攻計	44
合計	625

新研究科

理学研究科専攻名	自然科学 研究科学 生定員	理学研究 科 学生定員
数学専攻	18	22
物理学専攻	20	24
化学専攻	23	28
生物学専攻	22	22
地球惑星科学専攻	21	24
理学研究科合計	104	120

工学研究科専攻名	自然科学 研究科学 生定員	工学研究 科 学生定員
建築学専攻	64	65
市民工学専攻	42	43
電気電子工学専攻	64	65
機械工学専攻	66	78
応用化学専攻	63	73
情報知能学専攻	74	74
工学研究科合計	373	398

農学研究科専攻名	自然科学 研究科学 生定員	農学研究 科 学生定員
食料共生システム学専攻	24	27
資源生命科学専攻	37	42
生命機能科学専攻	43	50
農学研究科合計	104	119

海事科学研究科専攻名	自然科学 研究科学 生定員	海事科学 研究科 学生定員
海事科学専攻	44	60
海事科学研究科合計	44	60

合計	625	697
----	-----	-----

自然科学研究科博士課程後期課程

専攻名	学生定員	新研究科按分
数物科学専攻	13	理 13
分子物質科学専攻	21	理 8 工 13
地球惑星システム科学専攻	14	理 10 発 4
情報・電子科学専攻	17	工 17
機械・システム科学専攻	18	工 18
地域空間創生科学専攻	17	工 17
食料フィールド科学専攻	6	農 6
海事科学専攻	11	海 11
生命機構科学専攻	15	理 9 農 6
資源生命科学専攻	18	農 18
計	150	理 40 工 65 農 30 海 11 発 4

積算根拠

※2 学系にまたがる専攻は、H17.10.1 現在の教授、助教授で院生を比例配分

専攻名	定員	理	工	農	海	発
数物科学専攻	13	13				
分子物質科学専攻	21	8	13			
地球惑星システム科学専攻	14	10				4
情報・電子科学専攻	17		17			
機械・システム科学専攻	18		18			
地域空間創生科学専攻	17		17			
食料フィールド科学専攻	6			6		
海事科学専攻	11				11	
生命機構科学専攻	15	9		6		
資源生命科学専攻	18			18		
計	150	40	65	30	11	4

新研究科

理学研究科専攻名	自然科学研究科学生定員	理学研究科学生定員
数学専攻	6	4
物理学専攻	7	5
化学専攻	8	6
生物学専攻	9	8
惑星科学専攻	10	7
理学研究科合計	40	30

工学研究科専攻名	自然科学研究科学生定員	工学研究科学生定員
建築学専攻	10	8
市民工学専攻	7	6
電気電子工学専攻	10	8
機械工学専攻	12	10
応用化学専攻	13	10
情報知能学専攻	13	12
工学研究科合計	65	54

農学研究科専攻名	自然科学研究科学生定員	農学研究科学生定員
食料共生システム学専攻	6	6
資源生命科学専攻	12	8
生命機能科学専攻	12	11
農学研究科合計	30	25

海事科学研究科専攻名	自然科学研究科学生定員	海事科学研究科学生定員
海事科学専攻	11	11
海事科学研究科合計	11	11

人間発達環境学研究科	4	—
------------	---	---

合計	150	120
----	-----	-----

《資料 7 : 自然科学研究科博士前期課程(農学系)及び農学研究科博士課程前期課程専攻別入学者数 (平成 16 年度～平成 19 年度)》

自然科学研究科 (農学系)

年度	専攻・講座	定員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
16	応用動物学	18	37 (3)	33 (3)	28 (3)	27 (3)
	植物資源学	28(7)	28 (1)	28 (1)	27 (1)	21 (1)
	生物環境制御学	22	41 (1)	37 (1)	33 (1)	27 (1)
	生物機能化学	21	53 (6)	51 (6)	46 (6)	37 (6)
	食料生産環境工学	15	25 (3)	24 (3)	22 (3)	19 (3)
	計	104(7)	184 (14)	173 (14)	156 (14)	131 (14)
17	応用動物学	18	38	29	23	21
	植物資源学	28(7)	39 (6)	37 (6)	35 (5)	32 (5)
	生物環境制御学	22	39 (5)	35 (5)	34 (5)	31 (5)
	生物機能化学	21	43 (3)	37 (2)	29 (2)	25 (2)
	食料生産環境工学	15	23	20	18	14
	計	104(7)	182 (14)	158 (13)	139 (12)	123 (12)
18	応用動物学	18	42 (6)	34 (6)	30 (6)	26 (6)
	植物資源学	28(7)	44 (3)	42 (3)	36 (3)	28 (3)
	生物環境制御学	22	35	35	29	23
	生物機能化学	21	46	43	39	33
	食料生産環境工学	15	23 (2)	22 (2)	18 (2)	15 (2)
	計	104(7)	190 (11)	176 (11)	152 (11)	125 (11)

農学研究科

年度	専攻・講座	定員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
19	生産環境工学	20	27 (2)	27 (2)	27 (2)	23 (2)
	食料環境経済学	7	9 (2)	7 (2)	6 (2)	6 (2)
	応用動物学	20	42 (2)	40 (2)	30 (1)	27 (1)
	応用植物学	22	28	27	26	22
	応用生命化学	26	54 (2)	51 (2)	41 (2)	38 (2)
	農環境生物学	24	35 (1)	34 (1)	32 (1)	27 (1)
	計	119	195 (9)	186 (9)	162 (8)	143 (8)

《資料 8：自然科学研究科及び農学研究科博士課程後期課程入学者数等（平成 16 年度～19 年度入学者）》

自然科学研究科

年度	専攻	定員	志願者	合格者	入学者 進学者	進学者		入学者			計
						進学者	内留学生	留学生	一般	社会人	
16	数物科学	13	11	11	10	8			1	1	2
	分子物質科学	21	18	18	18	8		1		9	10
	地球惑星システム科学	14	23	23	22	17	1		3	2	5
	情報・電子科学	17	17	17	16	11		1		4	5
	機械・システム科学	18	18	18	18	5		4	1	8	13
	地域空間創生科学	17	21	18	16	8	2	1	1	6	8
	食料フィールド科学	6	9	9	9	6	2	2		1	3
	海事科学	11	17	17	17	9	6	4		4	8
	生命機構科学	15	20	18	16	7	1	1	7	1	9
	資源生命科学	18	16	16	16	10	1	2	3	1	6
計	150	170	165	158	89	14	16	16	37	69	
17	数物科学	13	13	10	9	6		1	2		3
	分子物質科学	21	25	25	25	8	1	10	1	6	17
	地球惑星システム科学	14	14	14	13	7			3	3	6
	情報・電子科学	17	13	13	13	4			4	5	9
	機械・システム科学	18	23	23	22	6	3	5	3	8	16
	地域空間創生科学	17	22	22	21	2	1	5	2	12	19
	食料フィールド科学	6	9	9	8	6	3	1	1		2
	海事科学	11	20	19	19	1		9	3	6	18
	生命機構科学	15	21	21	18	11		1	1	5	7
	資源生命科学	18	15	15	14	10	6	1	1	2	4
計	150	175	171	162	61	14	33	21	47	101	
18	数物科学	13	12	12	10	10	1				0
	分子物質科学	21	24	23	23	7	1	4	2	10	16
	地球惑星システム科学	14	13	13	12	8	1		3	1	4
	情報・電子科学	17	17	17	17	7		1	5	4	10
	機械・システム科学	18	18	18	18	8	1	1	4	5	10
	地域空間創生科学	17	18	18	18	0		7	2	9	18
	食料フィールド科学	6	5	5	5	2		3			3
	海事科学	11	18	17	17	7	6	6	1	3	10
	生命機構科学	15	13	13	11	4	1	2	3	2	7
	資源生命科学	18	19	19	19	13	4	2	3	1	6
計	150	157	155	150	66	15	26	23	35	84	

農学研究科

年度	専攻	定員	志願者	合格者	入学者 進学者	進学者		入学者			計
						進学者	内留学生	留学生	一般	社会人	
19	食料共生システム学	6	5	5	3	1	1	2			2
	資源生命科学	8	9	9	9	6	2	1		2	3
	生命機能科学	11	13	13	13	8	3	1		4	5
計	25	27	27	25	15	6	4	0	6	10	

※緑色のセルが農学系の専攻

《資料 9 : 教員数》

教員数(大学院課程(専門職を除く):平成18年5月1日現在)

研究科	専攻科・課程	専任教員数(現員)											助手		非常勤教員数		備考
		教授		助教授		講師		助教		計			男	女	男	女	
		男	女	男	女	男	女	男	女	計:男	計:女	総計					
自然科学研究科(農学系)	博士課程前期課程農学系 応用動物学専攻	8		6							14	0	14			3	
	博士課程前期課程農学系 植物資源学専攻	10	1	6		1	1			17	2	19			4		
	博士課程前期課程農学系 生物環境制御学専攻	10		7						17	0	17			2		
	博士課程前期課程農学系 生物機能化学専攻	9		7						16	0	16			1		
	博士課程前期課程農学系 食料生産環境工学専攻	6		3	1	1				10	1	11			1		
	博士課程後期課程 食料フィールド科学専攻	11		6	1	2				19	1	20			1		
	博士課程後期課程 生命機能科学専攻	9		7						16	0	16					
	博士課程後期課程 資源生命科学専攻	22	1	17				1		39	2	41			3	非常勤に連携教員2含む	

教員数(大学院課程(専門職を除く):平成19年5月1日現在)

研究科	専攻科・課程	専任教員数(現員)											助手		非常勤教員数		備考
		教授		准教授		講師		助教		計			男	女	男	女	
		男	女	男	女	男	女	男	女	計:男	計:女	総計					
農学研究科	食料共生システム学専攻	8	1	6		1		2		17	1	18			2	非常勤に業務教員1含む	
	資源生命科学専攻	12	1	12		1	1	8		33	2	35			5	研究員教員1、査読員教員5含む 非常勤に連携教員3含む	
	生命機能科学専攻	18		13				6	1	37	1	38			4		

観点 教育内容, 教育方法の改善に向けて取り組む体制

(観点に係る状況)

平成19年の自然科学研究科の改組に伴い、複数の学系にまたがるプログラム教育や、重点研究チームの研究活動を人材育成に反映する先端融合科学特論 I, II といった新カリキュラムを設定し、大学院教育の実質化を図った。一方、本研究科では、教員の質的向上を図るために専攻長らで構成される自己評価・点検委員会を設置し、授業評価に関する学生・教員アンケート調査とファカルティデベロップメント(FD)研修会を実施している。FD研修会は、立案を企画室(研究科長、副研究科長)が担当し、平成16年9月から平成19年11月まで7回開催(平均参加人数は約60人)した《資料10》。その内容は「教育方法改善」に加えて、「研究プロジェクト」や「産官学連携」など大学院レベルの教育研究に係る幅広いテーマで開催した。教務委員会がFD推進組織として、その実施等に関わるよう規則を整備し、教育方法の改善を図る体制を構築した。

《資料 10：自然科学研究科（農学系）及び農学研究科におけるファカルティデベロップメント（FD）の実施状況》

年月日	研修会題名と参加人数
平成 16 年 9 月 29 日	「よりよい授業に向けて－学生及び授業アンケートを終えて－」 講師：眞山滋志 農学部長，中村千春 自己点検・評価委員会委員長ら， 参加人数：65 名
平成 17 年 5 月 27 日	「植物と微生物の種を超えたコミュニケーション」 講師：杉本幸裕 神戸大学農学部教授，佐伯和彦 奈良女子大理学部教授ら， 参加人数：65 名
平成 17 年 6 月 28 日	「甲南大学の現状について－事務職員の能力向上に向けた取組－」 講師：中村英雄 甲南大学人事部人事課長 参加人数：50 名
平成 17 年 7 月 22 日	「理学部改修の前と後」 講師：佐々木武 神戸大学理学部教授・前理学部長 参加人数：65 名
平成 17 年 12 月 16 日	「学内発の卓越した研究プロジェクト－食の安全安心科学教育研究プロジェクト」 講師：内田一徳 農学部教授 参加人数：65 名
平成 18 年 1 月 18 日	「よりよい授業に向けて－学生及び授業アンケートを終えて－」 講師：農学部各学科代表教員 参加人数：65 名
平成 19 年 6 月 22 日	「食料・農業・農村白書」 講師：八百屋 市男 農林水産省大臣官房情報課課長補佐 参加人数：60 名

（2）分析項目の水準及びその判断理由

（水準） 期待される水準を上回る。

（判断理由）

基本組織の構成については、平成 19 年度に自然科学研究科の第 4 次改組を実施するなど、社会のニーズに適応した教育内容・教育方法の改善に向けた抜本的な大きな取組を行った。また、授業アンケート及び FD の取組を毎年実施し、教育組織、教育課程、教育内容の見直し等に向けた取組を行ってきていることから、本研究科の教育の実施体制は期待される水準を上回ると判断する。

分析項目Ⅱ 教育内容

(1) 観点ごとの分析

観点 教育課程の編成

(観点に係る状況)

本研究科博士課程前期課程では、社会からの多様なニーズに対応して、より専門的な後期課程の授業科目への継続性を配慮した91の専門科目に加え、学生に研究成果をまとめて発表する能力を身に付けることを目的としたプレゼンテーション演習、農学の幅広い素養と学際性を身に付けることを目的とした研究科内横断型の授業科目「食料・環境・健康生命」、さらに学際的視点を身に付けることを目的とした自然科学系4研究科共通の「先端融合科学特論Ⅰ」を配置し、教育課程を体系的に編成している《資料11》。また、学生に総合的専門知識を身に付けさせることを目的とする自然科学系3研究科と連携したプログラムコース認定制度を設けたほか《資料12》、大学教育国際化推進プログラム「アジア農業戦略に資する国際連携教育の推進」の採択に伴い、アジア地域の持続的食料生産と環境保全を目的とした「熱帯農学海外演習」、「アジア農業環境海外演習」や「国際動植物防疫演習」を開設し、学生が国際的視野に立って活躍するリーダーとしての素養を身に付けるよう配慮している《資料11》。前期課程の代表的な専門科目として、「食料・環境・健康生命(食料編)」《資料13》や「先端融合科学特論Ⅰ」《資料14》がある。

同後期課程では高度な学術研究を基盤にした26の授業科目を配置するとともに、他専攻の授業科目や自然科学系4研究科に共通した「先端融合科学特論Ⅱ」を設け、総合的・学際的視点を身に付けさせるよう配慮している《資料15》。また、グローバルCOEプログラムの採択に伴い、「膜生物学リサーチリーダー育成コース」を開設し、新たな科目を設定して膜生物学の分野における創造性と国際活動能力を有する若手研究者の育成を目指している《資料16》。代表的な専門科目として、「先端融合科学特論Ⅱ-3」がある《資料17》。

また、国費外国人留学生(研究留学生)の優先配置を行う特別プログラムの採択に伴い、前期課程・後期課程一貫の「食の安全安心科学を学ぶ」英語特別コースを設け、積極的に諸外国からの留学生を受け入れて食の安全安心科学を学ぶための教育を実施して、国内外からの要請である食の安全安心に資する研究者・技術者の養成を行っている《資料18》。

《資料11:神戸大学大学院農学研究科規則 別表第2 前期課程授業科目及び単位数等(第18条, 第32条関係) 平成19年4月1日制定 (抜粋)》

別表第2 前期課程授業科目及び単位数等(第18条, 第32条関係)

イ 食料共生システム学専攻

授 業 科 目	単 位 数	必修・選択必修・選択の別	備 考
先端融合科学特論Ⅰ-1	2	選択必修	
先端融合科学特論Ⅰ-2	2	〃	
先端融合科学特論Ⅰ-3	2	〃	
先端融合科学特論Ⅰ-4	2	〃	
先端融合科学特論Ⅰ-5	2	〃	
○食料・環境・健康生命(食料編)	2	選 択	
○食料・環境・健康生命(環境編)	2	必 修	
○食料・環境・健康生命(健康生命編)	2	選 択	
○プレゼンテーション演習	4	必 修	
食料共生システム学概論	2	選 択	
流域システム論	2	〃	
流域水文環境論	2	〃	
土地環境制御学	2	〃	
土地環境工学	2	〃	
施設環境論	2	〃	
施設機能工学	2	〃	
環境情報論	2	〃	
農用車両工学	2	〃	
土・車両システム論	2	〃	
アグリフードプロセス制御論	2	〃	
農産物性機能論	2	〃	
生物機械系制御論	2	〃	
栽培工程論	2	〃	
生産計画学	2	〃	
地域環境創成論	2	〃	
国際食料戦略論	2	〃	
食料環境経済論	2	〃	
農業組織管理論	2	〃	
農業組織経営学	2	〃	
食料産業システム論	2	〃	
社会経済情報論	2	〃	
国際農業論	2	〃	
課題開発演習	2	〃	
特別連携講義	2	〃	
熱帯農学海外演習	2	〃	
アジア農業環境海外演習	2	〃	
国際動植物防疫演習	2	〃	
特定課題演習Ⅰ	6	必 修	
特定課題演習Ⅱ	6	〃	
(研究指導)			

履修要件 30単位以上

必 修: 18単位

選択必修: 2単位

選 択: 10単位以上

ただし、下記により6単位まで算入できる。

- ①他専攻の授業科目を履修したとき。
- ②農学部、並びに本学の他研究科、他学部の授業科目について指導教員が必要と認め履修したとき。
- ③他大学大学院(外国の大学を含む。)の授業科目について指導教員が必要と認め、かつ所定の手続きを経て履修したとき。

《資料 12：自然科学系プログラム教育コース（プログラムコース）実施要領》

自然科学系プログラム教育コース（プログラムコース）実施要項

平成18年12月7日

（趣旨）

第1 この要項は、神戸大学大学院理学研究科、工学研究科、農学研究科及び海事科学研究科（以下「自然科学系研究科」という。）の各研究科規則に規定する自然科学系プログラム教育コース（以下「プログラムコース」という。）の実施に関し必要な事項を定める。

（プログラムコースの開設とその調整）

第2 プログラムコースは、自然科学系研究科の共同によって魅力的なテーマを選定し、これらを教育プログラム化するものとし、その開設と調整は、自然科学系教育研究推進会議が行う。

2 開設するプログラムコースは、年度ごとに別に定める。

（履修要件等）

第3 プログラムコースは学生の希望により履修するもので、それぞれのコースに応じて指定する自研究科と他研究科の科目群からなり、自研究科の前期課程修了要件に加えて、他研究科の科目4単位を含めて6単位を修得しなければならない。

なお、プログラムコースの修得単位数が6単位に満たない者が当該プログラムコースで修得した他研究科の単位は、自研究科規則に基づいて修了要件の単位に算入することができる。

（履修申請等）

第4 履修申請等は、次のとおりとする。

① 履修対象学生

プログラムコースが開設されている専攻のうち、いずれかの専攻に所属する学生とする。

② 履修可能なプログラムコース

原則として、一人1プログラムコースとする。

③ プログラムコースの定員

定員は設けない。ただし、希望者が多人数の時は調整する場合がある。

④ 履修申請方法

「プログラムコース履修申請書」を所属研究科の教務学生係に、所定の期間までに提出し、所定の履修登録を行うものとする。

（修了認定証の授与）

第5 プログラムコース修了の判定は、学生の所属する研究科において行い、修了を認定した者については、修了認定証を授与する。

2 修了認定証の様式は、別紙のとおりとする。

3 修了認定証は、学位記授与式の日に交付する。

（雑則）

第6 この要項に定めるもののほか、プログラムコースの実施に関し必要な事項は、自然科学系教育研究推進会議が定める。この事務は、自然科学系先端融合研究環事務部において行う。

《資料 13：平成 19 年度神戸大学大学院農学研究科博士課程前期課程履修要覧(抜粋)》

科目区分	専門科目
科目名	食料・環境・健康生命（食料編） Food, Environment and Healthy Life (Section of Food)
単位数	2 単位
担当教員	教授 長谷川 信 HASEGAWA Shin, 教授 向井 文雄 MUKAI Fumio, 教授 北川 浩 KITAGAWA Hiroshi, 教授 大澤 朗 OSAWA Ro, 准教授 河野 潤一 KAWANO Junichi, 准教授 上曾山 博 KAMISOYAMA Hiroshi, 准教授 万年 英之 MANNEN Hideyuki, 准教授 三十尾 修司 MISOO, Shuji, 教授 金澤 洋一 KANAZAWA Yoichi, 教授 中西 テツ NAKANISI Tetsu, 教授 稲垣 昇 INAGAKI Noboru, 教授 寺井 弘文 TERAJ, Hirobumi, 教授 伊藤 一幸 ITOH Kazuyuki, 教授 保坂 和良 HOSAKA, Kazuyoshi
期・曜日・時限	前期・水曜日・1 時限
対象学生・学年 (必修・選択の別)	資源生命科学専攻（前期課程）1 年（必修）、食料共生システム学専攻（前期課程）1 年（選択）、生命機能科学専攻（前期課程）1 年（選択）
授業目的	持続的食糧生産に必須な動植物遺伝資源と栽培作物及び家畜・家禽について、それらの有効利用技術と機能開発に向けた資源生命科学の発展について論述する。
授業内容・計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. 動物育種と食料生産の現状 3. 牛肉品質の遺伝子診断 4. 栄養代謝学Ⅰ 5. 栄養代謝学Ⅱ 6. 食品の微生物汚染 7. 応用腸内細菌学 8. 食物と生体防御 9. 植物遺伝資源の利用技術 10. 植物育種と組織培養 11. 果樹の生殖形質 12. 園芸作物の特性 13. 園芸生産物の品質保全 14. 熱帯作物資源の持続的管理 15. 森林の持続可能な管理・経営
教科書・参考書	参考書等については授業中に紹介する。また、毎時間、プリント等を配布し、これに沿って授業を進める。
成績評価方法	レポートの成績（80 点満点）と出席点（20 点満点）を総合評価する。
履修要件・メッセージ	
備考	2007 年度生以降対象科目

《資料 14：平成 19 年度神戸大学大学院農学研究科博士課程前期課程履修要覧(抜粋)》

科目区分	専門科目
科目名	先端融合科学特論 I-4 (循環型地域環境の創成科学研究) Advanced Science and Technology I-4
単位数	2 単位
担当教員	教授 内田 一徳 UCHIDA Kazunori、教授 田中丸 治哉 TANAKAMARU Haruya、准教授 河端 俊典 KAWABATA Toshinori、准教授 伊藤 博通 ITOH Hiromichi、教授 加古 敏之 KAKO Toshiyuki、教授 小野 雅之 ONO Masayuki、教授 金澤 洋一 KANAZAWA Yoichi、准教授 上曾山 博 KAMISOYAMA Hiroshi、准教授 藤嶽 暢英 FUJITAKE Nobuhide
期・曜日・時限	前期・集中
対象学生・学年 (必修・選択の別)	理学研究科・工学研究科・農学研究科・海事科学研究科(前期課程) 1年(選択必修)
授業目的	人・物・資源の健全で持続的な循環という俯瞰的視点から、農業農村地域の生産基盤と都市の流通・消費に至る全プロセスを通じた共生環境を創成するための科学技術や戦略のグローバルスタンダード樹立を目指す研究について講述する。
授業内容・計画	農業農村地域の共生環境を創成するための科学技術や戦略について講述する。 ① 健康で安全安心なゆとりある住環境をもつ農村地域計画の樹立と都市域からの移住戦略の立案 ② 安全安心な食料の安定供給を達成するための国内及びアジアを含めた国際農業戦略の立案 ③ 森林・農地・ため池などの統合管理による健全なバイオマスエネルギー資源・水資源・土壌資源・生態系資源の保全管理技術の開発
教科書・参考書	なし(資料を配付する)
成績評価方法	出席点(20%)及びレポート(40%)・発表(40%)によって成績評価する。
履修要件・メッセージ	なし
備考	「食料フィールド科学概論」(2006年度生以前)

《資料 15：神戸大学大学院農学研究科規則 別表第3 後期課程授業科目及び単位数等
(第18条, 第32条関係) 平成19年4月1日制定 (抜粋)》

イ 食料共生システム学専攻			
授 業 科 目	単 位 数	必修・選択の別	備 考
先端融合科学特論Ⅱ-1	2	選 択	
先端融合科学特論Ⅱ-2	2	〃	
先端融合科学特論Ⅱ-3	2	〃	
先端融合科学特論Ⅱ-4	2	〃	
流域環境学	2	〃	
地域計画学特論	2	〃	
生産土地環境論	2	〃	
水利施設工学特論	2	〃	
テラメカニクス特論	2	〃	
統合生産システム論	2	〃	
ポストハーベスト工学特論	2	〃	
生産計画学特論	2	〃	
食料需給経済論	2	〃	
農業経営戦略論	2	〃	
食料情報システム論	2	〃	
特定研究Ⅰ	3	必 修	
特定研究Ⅱ	3	〃	
(研究指導)			

履修要件 10単位以上

必 修：6単位
選 択：4単位以上

ただし、自専攻の授業科目から2単位以上
並びに他専攻及び他研究科の授業科目から
2単位以上修得すること

《資料 16:神戸大学大学院農学研究科教授会資料 13 (平成 19 年 9 月 7 日開催)》

農学研究科博士課程後期課程臨時授業科目の開設について

規 則 : 農学研究科規則第18条第2項適用による開設
 開設期間 : 平成19年度後期から平成23年度まで
 開設科目 : 下記のとおり
 開設理由 : グローバルCOE「膜生物学リサーチリーダー育成コース」の特設科目
 開講のため

規則別表第3 後期課程授業科目及び単位数等

ロ 資源生命科学専攻

科 目 名	単 位 数	必修・選択の別	備 考
リサーチプロポーザル(英文)	2	選択	
膜生物学特論	2	選択	
生命科学論文・申請書作成特論	1	選択	
大学院特別英語	1	選択	

ハ 生命機能科学専攻

科 目 名	単 位 数	必修・選択の別	備 考
リサーチプロポーザル(英文)	2	選択	
膜生物学特論	2	選択	
生命科学論文・申請書作成特論	1	選択	
大学院特別英語	1	選択	

備考 1. 「リサーチプロポーザル(英文)」を履修することができるのは上記専攻の学生に限り、英文によるリサーチプロポーザル申請書を提出することが前提条件となる。
 2. 「膜生物学特論」、「生命科学論文・申請書作成特論」、「大学院特別英語」についてはリサーチプロポーザル申請書を提出しない学生(他専攻の学生も含む。)も履修することができる。

《資料 17：平成 19 年度神戸大学大学院農学研究科博士課程後期課程履修要覧(抜粋)》

科目区分	専門科目
科目名	先端融合科学特論Ⅱ-3 (ゲノム育種研究) Advanced Science and Technology II-3
単位数	2 単位
担当教員	教授 向井 文雄 MUKAI Fumio、教授 中村 千春 NAKAMURA Chiharu、 教授 保坂 和良 HOSAKA Kazuyoshi、准教授 森 直樹 MORI Naoki、准教 授 万年 英之 MANNEN Hideyuki、准教授 石井 尊生 ISHII Takashige、 准教授 宅見 薫雄 TAKUMI Shigeo、准教授 大山 憲二 OHYAMA Kenji、 准教授 高崎 剛志 TAKASAKI Takeshi
期・曜日・時 限	前期・集中
対象学生・学 年 (必修・選択 の別)	工学研究科、理学研究科、農学研究科、海事科学研究科(後期課程)1年(選 択)
授業目的	ゲノムに蓄積された有用遺伝情報の解明及びゲノム情報を用いた未来型食料 資源の開発や次世代育種技術の確立を目指した方法論を理解する。
授業内容・計 画	有用遺伝子の同定法、遺伝的能力評価法、倍数体ゲノム、DNAプロファイリ ング、遺伝的多様性解析、品質評価技術などをキーワードとし、食の安全安 心と持続的生産に関する最新研究を講述する。
教科書・参考 書	なし
成績評価方 法	出席状況・受講態度・レポート評価・小テストなどによる
履修要件・メ ッセージ	遺伝学の基礎知識を有することが望ましい。
備考	

《資料 18：神戸大学大学院農学研究科教授会資料 5（2 ページ目を抜粋）（平成 19 年 2 月 9 日開催）》

2007年度（10月入学）

神戸大学大学院農学研究科

「食の安全安心科学を学ぶ」特別コース学生募集要項

1. 専攻及び募集人員

専攻	人員
食料共生システム学専攻	4人 (国費2人, 私費2人)
資源生命科学専攻	
生命機能科学専攻	

※神戸大学大学院農学研究科は、大学院自然科学研究科の改組により平成19年4月に新たに設置される予定の研究科です。（農学研究科の設置は概算要求中であり、名称その他の計画に変更がある場合があります。）

2. 「食の安全安心科学を学ぶ」特別コースの特色

- (1) 英語を主にして教育研究を先行的に進め、2年以内で（2007年10月-2009年9月）修士の学位を取得することを、さらに3年以内で（2009年9月-2012年9月）博士の学位を取得することを目的とする5年間のコースです。日本語は留学生活に必要なレベルまで修得することができます。
- (2) 博士前期課程では、食の安全安心科学を学ぶためのインセンティブ教育を、博士後期課程では、JICA連携講義や国内外インターンシップを取り入れた実践的国際リーダー教育を行います。
- (3) 在学中の研究成果を学位申請論文としてまとめ、本研究科に提出することができます。それを学位論文として認めたとき、神戸大学から、博士前期課程では修士（農学）の学位が、博士後期課程では博士（学術又は農学）の学位が授与されます。
- (4) 神戸大学における厳正な書類選考のうえ、出願者のうち上位2名は「食の安全安心科学を学ぶ」特別コースの国費外国人留学生として、文部科学省に推薦する予定です。

* 国費外国人留学生については、8. 文部科学省国費外国人留学生の奨学金等を参照してください。

観点 学生や社会からの要請への対応

(観点に係る状況)

本研究科では、学生や社会からの多様なニーズに対応した教育課程の編成に配慮し、以下の取組を実施している。

前期課程・後期課程一貫教育としての「食の安全安心科学を学ぶ」英語特別コースを設け、積極的に諸外国からの留学生を受け入れて食の安全安心科学に関する教育を実施している《資料 18(p 22-19)》。また、開発途上国からの研修生を対象とした JICA プログラムへ前・後期課程学生を参加させて学生の技術修得にも配慮するとともに《資料 19》、若手研究者インターナショナル・トレーニングプログラム(ITP)「食糧危機に備え資源保全を EU に学びアジアに活かす国際農業戦略の実践トレーニング」が採択され《資料 20》、後期課程の教育に活用することにより、アジアを含めた各国における農業技術等を支援している。また、社会の研究・技術系の職業分野のニーズに応えるべく、自然科学系先端融合研究環の 5 研究プロジェクトに学生を参加させ、研究能力の向上や共同研究の手法にも習熟できるよう配慮している。

自然科学研究科(農学系)及び本研究科の後期課程では社会人を多数受け入れてきており、多様化する社会で活躍する技術者、技術教育の現場で活躍する教員や行政職者に対して広く門戸を開放してリフレッシュ教育や生涯教育の場を提供するとともに博士の学位の取得の機会を広げて技術者や教員等の質的向上を図り、社会に直結した実践教育を推めている《資料 21》。この一環として、大学設置基準第 14 条に定める教育方法の特例を実施し、平日の授業等に参加することが困難な社会人に対する時間外の授業を可能とするとともに、勤務先における研究を可能にした《資料 22》。

《資料 19：自然科学研究科(農学系)及び農学研究科の博士課程前期課程・後期課程における開発途上国の研修生に対する JICA プログラムへの学生の参加状況》

年度	前期課程学生数	後期課程学生数	JICA プログラム
平成 16 年度	13	1	アグロバイオテクノロジーコース
	2	2	植物保護のための総合防除コース
平成 17 年度	20	4	アグロバイオテクノロジーコース
	3	6	植物保護のための総合防除コース
平成 18 年度	12	1	アグロバイオテクノロジーコース
	0	2	植物保護のための総合防除コース
平成 19 年度	9	2	アグロバイオテクノロジーコース
	1	3	植物保護のための総合防除コース
合計	60	21	

《資料 20：若手研究者インターナショナル・トレーニングプログラム(ITP)「食糧危機に備え資源保全をEUに学びアジアに活かす国際農業戦略の実践トレーニング」の採択通知》

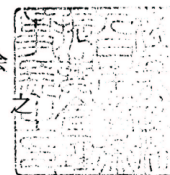
学振協一第1-14号

平成19年9月25日

国立大学法人神戸大学長 殿

独立行政法人日本学術振興会

理事長 小野 元



若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム (ITP)

平成19年度募集の審査結果について (通知)

先に貴学より申請のあった下記については、審査の結果、採択と決定しました。ついては、この旨、貴学関係者に周知くださるようお願いいたします。

記

1. 事業名 食糧危機に備え資源保全をEUに学びアジアに活かす国際農業戦略の実践的トレーニング
2. 申請専攻等 農学研究科

(本件問い合わせ先)

日本学術振興会

国際事業部研究協力第一課

ITP担当 萩尾、生田目

TEL：03-3263-1938

《資料 21：自然科学研究科（農学系）及び農学研究科の博士課程後期課程への社会人学生の入学者数》

年度	入学定員	入学者数	社会人学生の入学者数	
			自然科学研究科 後期課程農学系	農学研究科 後期課程
平成 16 年度	150	158	2	—
平成 17 年度	150	159	3	—
平成 18 年度	150	150	1	—
平成 19 年度	25	25	—	5
合 計	475	492	6	5

《資料 22：平成 19 年度神戸大学大学院農学研究科履修要覧（4 頁より抜粋）》

※社会人学生のための教育方法の特例について

農学研究科博士課程後期課程では、大学院設置基準 14 条に定める教育方法の特例を実施しています。概要は次の通りです。

1. 指導教員の合意を得て、授業及び研究指導の一部を夜間及び特定の時期に受講することができます。
2. 学位論文の作成が進展しており、企業等に研究に関する優れた施設や設備があり、それを用いた方が成果が上がると、指導教員が認める場合には、勤務する企業等においても研究することができます。

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を大きく上回る。

(判断理由)

本研究科では、専攻分野での高度な学術研究を基盤とする学際的視点及び専門性の他に農学の幅広い素養と学際性、国際性及びプレゼンテーション能力等を身に付けるという目的に沿った教育課程を体系的に編成している。また、学生や社会からの多様なニーズに対応した先端融合研究環の重点研究チームへ学生の参加、グローバル COE への学生の参加、アジア農業戦略に資する国際連携教育の活用及び若手研究者インターナショナル・トレーニングプログラム (ITP) 「食糧危機に備え資源保全を EU に学びアジアに活かす国際農業戦略の実践トレーニング」の活用等は、本研究科が対象とする学問分野や職業分野からの期待に十分応えるものであり、「観点 関係者からの評価」での記載のように学生に対する本研究科の関係する学術団体や学生の就職先からの高い評価はこれを裏付けている。

さらに、アジアを含めた各国における農業技術支援や社会人のリフレッシュ教育、生涯教育等、学生や国際社会を含めた社会からのニーズに配慮した編成となっている。

以上の理由から、本研究科の教育内容は期待される水準を大きく上回っていると判断する。

分析項目Ⅲ 教育方法

(1) 観点ごとの分析

観点 授業形態の組合せと学習指導法の工夫

(観点に係る状況)

本研究科では、少人数による講義を基本とし、実地演習やフィールド型演習等、経験を伴った知識を習得させる授業科目を重視している。また、早い時期から研究活動に参加させることによって自立した研究者としての研究能力と高度の専門的知識・技術を有する人材を育成している。

また、指導教員の他教育研究機関への転出や学生の研究の実施上の必要性から他研究機関への学生の研究指導委託を認めており、学生の研究活動がより高度となるよう配慮している《資料 23, 24》。さらに自然科学研究科（農学系）では学生に対する指導教員が1名であったが、平成19年度発足の農学研究科では副指導教員制度を設け、複数教員による指導体制とした。これによって学生に対する指導体制をより確実なものとした《資料 25》。

博士課程前期課程・後期課程の学生を通常のTAとして採用した他《資料 26》、後期課程では一般のRAに加えて自然科学研究科独自の研究プロジェクト採用によるNRA制度、また本研究科独自の研究プロジェクト採用によるARA制度及びCOEやG-COEの採択に伴うRA制度を設けて採用し《資料 27》、学生の教育・研究上の能力の開発に役立て、学生の経済的負担を軽減するとともに、博士の学位を取得しようとする者が積極的に研究の場に参加できるよう配慮している。

各授業科目の担当教員名、授業目的、授業内容・計画等を掲載した履修要覧（シラバス）を新生に配布するとともに、ウェブサイト上にも掲載し、学習の便宜を図っている。また、履修要覧を用いて新生ガイダンスの説明に活用するとともに《資料28》、学期の初めに履修登録する際にも活用を促している。

《資料 23：神戸大学大学院農学研究科規則抜粋（平成19年4月1日制定）》

(他大学大学院等の研究指導)

第24条 学生は、教授会の承認を得て、研究科と協定している他大学の大学院又は研究所等(外国の研究機関を含む。)において研究指導を受けることができる。ただし、当該研究指導を受けることができる期間は、前期課程の学生にあつては1年、後期課程の学生にあつては2年を超えないものとする。

2 前項ただし書の規定にかかわらず、後期課程の学生にあつては、特別の事情があると認められる場合に限り、2年を超えて前項の研究指導を受けることができるものとする。

《資料 24：自然科学研究科（農学系）及び農学研究科における後期課程学生の他研究機関への指導委託状況》

年度	後期課程学生数	指導委託先
平成17年度	1	独立行政法人 農業生物資源研究所
平成18年度	1	独立行政法人 農業生物資源研究所
平成19年度	1	国立感染症研究所
	1	独立行政法人 農業生物資源研究所
合計	4	

《資料 25：農学研究科博士課程学生の論文指導に関する申合せ》

農学研究科博士課程学生の論文指導に関する申合せ

平成19年4月1日制定

1. この申合せは、農学研究科博士課程前期課程学生及び後期課程学生の指導教員（農学研究科規則第20条関係）及び副指導教員について、必要な事項を定めるものとする。

（前期課程学生の指導教員）

2. 指導教員は、学生の修士論文に係わる一連の研究指導を行うものとする。
3. 指導教員は、神戸大学大学院農学研究科教員資格審査委員会（以下「資格審査委員会」という。）において、前期課程学生の研究指導及び講義担当適格者として認められた者とする。
4. 指導教員の選定は、学生及び学生が所属する教育研究分野の協議による。

（後期課程学生の指導教員）

5. 指導教員は、学生の博士論文に係わる一連の研究指導を行うものとする。
6. 指導教員は、資格審査委員会において、後期課程学生の研究指導及び講義担当適格者として認められた者とする。
7. 指導教員の選定は、学生及び学生が所属する教育研究分野の協議による。

（副指導教員）

8. 修士論文並びに博士論文の指導においては、副指導教員を置くものとする。
9. 修士論文の副指導教員は、3項の資格適格者とする。
10. 博士論文の副指導教員は、6項及び3項の資格適格者とする。
11. 副指導教員は、指導教員の推薦に基づき、専攻・講座が選定する。
12. 連携講座の副指導教員は、連携講座外の教員とする。

（その他）

13. 学生の修士論文及び博士論文指導に必要な他の事項は、専攻・講座において別途定める。

附 則

この申合せは、平成19年4月1日から施行する。

《資料 26：自然科学研究科（農学系）及び農学研究科におけるティーチングアシスタント（TA）の採用状況》

年度	学期	前期課程 TA 採用学生数	後期課程 TA 採用学生数
平成 16 年度	前期	76	20
	後期	115	30
平成 17 年度	前期	105	28
	後期	103	26
平成 18 年度	前期	120	29
	後期	63	15
平成 19 年度	前期	92	29
	後期	97	29
合計		771	206

《資料 27：自然科学研究科（農学系）及び農学研究科における各種リサーチアシスタント（RA）採用状況》

	自然科学研究科（農学系）			農学研究科		
	RA	NRA	COE RA	RA	ARA	G-COE RA
平成 16 年度	1	4	6	5	-	-
平成 17 年度	10	4	2	6	-	-
平成 18 年度	3	5	4	7	-	-
平成 19 年度	-	-	-	8	4	1
合計	14	13	12	26	4	1

《資料28：平成19年度農学研究科新入生ガイダンス式次第》

平成19年度神戸大学大学院農学研究科 新入生ガイダンス式次第		
日 時	平成19年4月9日(月) 10:30～	
場 所	C101教室	
次 第	1. 出席者紹介(研究科長、副研究科長、専攻長、副専攻長、 教務委員長、学生委員長)	
(司 会) 事務長	2. 挨拶	大学院農学研究科長 中村教授
	3. 教務関係事項説明	教務委員長 北川教授
	4. 学生関係事項説明	学生委員長 北川教授
	5. 質疑応答	
専攻・講座別ガイダンス(各専攻・講座関係教員)		
食料共生システム学専攻	生産環境工学講座	B203教室
〃	食料環境経済学講座	B303教室
資源生命科学専攻	応用動物学講座	B204教室
〃	応用植物学講座	C101教室
生命機能科学専攻	応用生命化学講座	B304教室
〃	農環境生物学講座	B101教室
◎ 配布書類について		
1) 新入生ガイダンス式次第(本表)		
2) 学生証、アカウント通知書(受付で配付)		
3) 研究科長説明資料		
4) 学生便覧		
5) 履修要覧		
6) 平成19年度前期授業時間割表		
7) 授業申請コード一覧		
8) 平成19年度プログラム教育コース科目一覧表(前期課程のみ)		
9) 平成19年度プログラム教育コース履修申請書(前期課程のみ)		
10) 教務情報システム利用の手引き(学生用)		
11) 修登録一覧(提出用)		
12) 安全の手引		
13) 通学定期乗車券発行控		
14) 通学定期券の購入について		
15) 研究題目届(履修届提出時に提出)		
16) 環境管理ガイドブック		
17) 農学研究科教務学生係の事務室について		
◎ その他		
宣誓書、学生登録票、卒業証明書(平成19年3月に他大学卒業者のみ) は、出口で必ず提出してください。		

観点 主体的な学習を促す取組

(観点に係る状況)

自然科学研究科（農学系）及び本研究科の前期課程・後期課程では、研究指導を通じて自立した研究者としての研究能力と高度の専門的知識・技術を有する人材を育成するため、開講科目のうち、多くの科目で講義内容に関わる課題を課して授業時間外での学習を促し、レポートを提出させるか、または口頭発表させるなどし《資料 13, 14, 17 (p 22-14, 22-15, 22-18)》、十分な学習時間を確保するとともに、履修要覧を学生に配付し、また、その内容をホームページへも掲載することにより、学生の準備学習等の活用を促している。

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由)

授業構成は、少人数講義を基本としつつ実地型の演習を重視したものになっている。自然科学研究科（農学系）における学生に対する指導教員は1名であったが、本研究科では副指導教員を設けて複数の指導体制とし、学生に対する指導体制をより確実にした。

また、多くの授業で課題を課すとともに、授業毎に必要な準備学習を記載した履修要覧をホームページ上に常時公開することで活用を促している。

以上の根拠から、観点に求められていることを全て満たしており、本研究科の教育方法は、期待される水準を上回っていると判断する。

分析項目Ⅳ 学業の成果

(1) 観点ごとの分析

観点 学生が身に付けた学力や資質・能力

(観点に係る状況)

平成 19 年度発足の本研究科では未だ修了生を輩出していないため、評価することができないが、自然科学研究科前期課程（農学系）に入学した者に対して修士の学位を授与した者の比率は概ね 90%前後であり《資料 29》、さらに優秀な成績を修めた者に対しては早期修了制度を適用している《資料 30》。また、平成 14～17 年度の 4 年間における後期課程（農学系）への入学者数は 102 名であり、これらの入学生の修了時における課程博士取得者数は 90 名であることから、入学者数の 88.2%に相当する者に学位を授与している《資料 31》。後期課程で優秀な成績を修めた者に対しても前期課程と同様に早期修了を適用している《資料 32》。

自然科学研究科博士課程前期課程・後期課程（農学系）の修了生に対するアンケート調査では、79.2%の修了生が在学時に積極的に授業や研究に参加したと自己評価しており《資料 33》、その成果の表れとして自然科学研究科博士課程前期課程・後期課程（農学系）及び本研究科における学生の学会等におけるポスター・口頭発表数《資料 34》及び研究論文の出版数《資料 35》が毎年多数であるとともに、学会発表や公表論文に対する各種の賞も毎年多数受けてきた《資料 36》。さらに多くの学生が在学時の研究活動に関連した特許の取得にも関与してきており、学生が身に付けた学力や資質がこれらの点からも高いレベルにあることが判る《資料 37》。

《資料 29：自然科学研究科（農学系）の博士課程前期課程各専攻における学位（修士）の授与状況》

	応用動物学	植物資源学	生物環境制御学	生物機能化学	食料生産環境工学	合計	学位授与率
平成 16 年度	25/25	15/24	37/40	26/26	21/21	124/136	91.2%
平成 17 年度	24/26	18/24	25/28	36/37	16/17	119/132	90.2%
平成 18 年度	25/26	28/35	28/33	23/23	13/14	117/131	89.3%
平成 19 年度	22/23	30/33	24/27	30/31	16/16	122/130	93.8%
合計	96/100	91/116	114/128	115/117	66/68	482/529	91.1%

《資料 30：自然科学研究科（農学系）の博士課程前期課程各専攻における早期修了の適用状況》

	応用動物学	植物資源学	生物環境制御学	生物機能化学	食料生産環境工学	合計
平成 16 年度	0	0	0	0	2	2
平成 17 年度	0	0	0	0	0	0
平成 18 年度	3	0	0	0	0	3
平成 19 年度	0	0	0	0	0	0
合計	3	0	0	0	2	5

《資料 31：自然科学研究科博士課程後期課程（農学系）における学位（博士）の授与状況》
平成 19 年度の課程博士取得者は農学系における博士取得者数

年度	課程博士取得者数 (A)	対象年度の入学者数 (B)	学位授与率 (A/B)
平成 16 年度	26 名	24 名	108.3%
平成 17 年度	25 名	23 名	108.7%
平成 18 年度	21 名	27 名	77.8%
平成 19 年度	18 名	28 名	64.3%
合計	90 名	102 名	88.2%

《資料 32：自然科学研究科博士課程後期課程（農学系）における早期修了の適用状況》

年度	早期修了者数
平成 16 年度	0
平成 17 年度	2
平成 18 年度	0
平成 19 年度	3
合計	5

《資料 33：自然科学研究科博士課程前期課程及び後期課程（農学系）の修了生に対するアンケート調査結果（一部抜粋）》

修了生へのアンケート集計（平成 19 年度実施）

Ⅱ. 個別評価

1) 在学時、授業や研究に積極的に参加し、活動されましたか。

1. 大変積極的に参加・活動した	21 名
2. どちらかという積極的に参加・活動した	21 名
3. どちらかという参加・活動していない	10 名
4. ほとんど参加・活動していない	1 名

《資料 34：自然科学研究科（農学系）及び農学研究科の学生による学会等での研究発表状況》

年度	国内学会等での発表件数		国際学会等での発表件数		合計
	前期課程	後期課程	前期課程	後期課程	
平成 16 年度	126	17	65	44	252
平成 17 年度	131	14	90	33	268
平成 18 年度	113	35	84	25	257
平成 19 年度	131	32	78	10	251
合計	501	98	317	112	1,028

《資料 35：自然科学研究科（農学系）及び農学研究科における学生の学会誌等での論文発表状況》

年度	前期課程	後期課程	合計
平成 16 年度	91	8	99
平成 17 年度	55	24	79
平成 18 年度	86	32	118
平成 19 年度	90	74	164
合計	322	138	460

《資料 36：自然科学研究科（農学系）及び農学研究科の学生による学会発表・公表論文に対する授賞状況》

年度	受賞名・学生氏名	受賞発表題目	授賞団体
平成 16 年度	優秀ポスター発表賞	Suppressive effects of catechins on differentiation of 3T3-L1 preadipocytes.	International Conference of O-CHA (Tea) Culture and Science.
	第 45 回日本哺乳動物卵子学会学術奨励賞(発表部門)	マウス ntES 細胞の系統別樹立成績について	日本哺乳動物卵子学会
	Best Oral Presentation Award in Kobe University The 21st Century COE Program Symposium “Signal Transduction in Gametogenesis and Fertilization”	Male pronucleus formation of pig enucleated and enucleolated oocytes after maturation and fertilization.	Discussion Meeting for Young Scientists, 2004, Kobe University the 21st Century COE Program
	日本畜産学会第 105 回大会優秀発表賞	成熟及び受精過程におけるブタ卵母細胞の核小体の消失・形成の制御	日本畜産学会
	論文奨励賞	ジオグリッドを用いた圧力管路曲管部スラスト防護工法に関する実験	国際ジオシンセティックス学会日本支部
平成 17 年度	農村計画学会ベストペーパー賞	マルチエージェントモデルによる農地流動化要因の影響評価 -兵庫県神崎町 Y 集落を事例として-	農村計画学会
	日本動物遺伝育種学会セレクティッドポスター賞	ニホンウズラ連鎖地図に対する機能遺伝子のマッピング	日本動物遺伝育種学会
	日本動物遺伝育種学会セレクティッドポスター賞	ウシ SREBP-1 遺伝子における変異と脂肪酸組成との関連	日本動物遺伝育種学会
	日本動物遺伝育種学会学会長特別賞	ニワトリ筋ジストロフィー原因候補遺伝子の解析	日本動物遺伝育種学会
	日本動物遺伝育種学会セレクティッドポスター	国産牛とオーストラリア産牛を識別する DNA マーカーの開発	日本動物遺伝育種学会
	第 56 回関西畜産学会優秀発表賞（第 1 位）	ブタ精子の頭部における cAMP 依存性細胞内カルシウム濃度上昇に及ぼす炭酸水素ナトリウム及び PKA 阻害剤の影響	関西畜産学会
	Asian Reproductive Biotechnology Society, Third Annual Conference, Poster Presentation Award・Phan, T.C	Maturation competence of growing pig oocytes after short-term growth culture	Asian Reproductive Biotechnology Society
	学生口頭発表第 3 位受賞	The salinity tolerance evaluation of two eco-types of <i>Oryza sativa</i> L. at different growth stages in successive salinity levels.	The 3rd international conference on sustainable agriculture for food, energy and industry
	Best poster award in 1st International Symposium for Cancer Prevention, May 2005, Kyoto, Japan.	Fucoxanthin induces G0/G1 arrest in HepG2 cells through down regulation of Cyclin D.	国際がん予防学会
	若手フロンティア研究会 2005 優秀ポスター賞	シロイヌナズナ T7 フェージ型 RNA ポリメラーゼ RpoT;2 の機能解析	神戸大学研究基盤センター
	第一回神戸大学フロンティア・テクノロジー・フォーラム優秀ポスター賞 修士課程部門	果実を用いたタンパク質発現システムの構築と応用	神戸大学連携創造本部
	第一回神戸大学フロンティア・テクノロジー・フォーラム優秀ポスター賞 修士課程部門	ダイズ ELIP 遺伝子の青色光/UV-A 応答性発現を調節するシスエレメント	神戸大学連携創造本部
	農業土木学会京都支部 支部賞 研究奨励賞	柵渠水路底面の浸透破壊 - 平常水位時と水位上昇時の解析 -	農業土木学会京都支部
	優秀論文発表者賞	・軽量スラスト防護工法に関する水平載荷試験の地表面画像解析	地盤工学会
優秀論文発表者賞（2名）	・ため池改良底泥土の力学特性	地盤工学会	

	The JRD Outstanding Paper Award in 2005	Mice cloned by nuclear transfer from somatic and ntES cells derived from the same individuals	日本繁殖生物学会
	First Prize of Poster Presentation Award, 2005	An application of ntES technology for reservation of mouse genetic resources without gamete cell.	The 2nd Asian Reproductive Biotechnology Conference, Thailand
	Lalor Foundation Travel/Merit Award, 2005	Normality of nuclear transfer embryonic stem cell lines derived from adult somatic cells.	38th Annual Meeting of the Society for the Study of Reproduction, Canada
	3 rd Award for Student Competition in Oral Presentation, 2005	The salinity tolerance evaluation of two eco-types of <i>Oryza sativa</i> L. at different growth stages in successive salinity levels.	The 3rd International Conference on Sustainable Agriculture for Food, Energy and Industry, Canada
平成 18 年度	学生口頭発表コンペティション「若人よ、君の研究を熱く語れ！」受賞：優勝	フラボノイドはいかにしてアリアル炭化水素受容体の形質転換を抑制しているのか	第2回中部食品科学研究交流会・フードサイエンスフォーラム合同研究集会
	ポスター発表：優秀賞	クルクミンのアリアル炭化水素受容体形質転換調節機構の解明	神戸大学若手フロンティア研究会
	第二回神戸大学フロンティア・テクノロジー・フォーラム優秀ポスター賞 博士課程部門	ダイズフラボノイド合成系酵素遺伝子のcGMPによる発現調節	神戸大学連携創造本部
	学生優秀賞	雄親への TCDD(2,3,7,8-tetrachlorodibenzo-p-dioxin) 曝露による次世代性比への影響ならびに TCDD 感受性と性比との関連評価	日本アンドロロジー学会
	平成18年度日本作物学会論文賞	Enhancement of rice leaf photosynthesis by crossing between cultivated rice, <i>Oryza sativa</i> and wild rice species, <i>Oryza rufipogon</i> .	日本作物学会
	優秀論文発表者賞	埋設管の水平載荷時挙動に関する数値解析からの検討	地盤工学会
	日本食品工学会第7回年次大会優秀ポスター賞	電気インピーダンスによる発酵時のパン生地内気泡の計測	日本食品工学会
	学会長特別賞	ニワトリ筋ジストロフィー原因候補遺伝子の解析	日本動物遺伝育種学会
	日本農業気象学会奨励賞	京都府南部広葉樹林において短期間に測定された根呼吸量の土壌呼吸量に対する寄与の評価	日本農業気象学会
	優秀ポスター賞	シロイヌナズナ T7 フェージ型 RNA ポリメラーゼ RpoT;2 の機能解析	神戸大学連携創造本部
ポスター賞（優秀賞）	マイクロアレイによる水生植物ヒルムシロ属の高温ストレス応答の解析	日本生態学会	
平成 19 年度	学生優秀発表賞	ナシ黒斑病菌の貫穿菌糸における活性酸素種(ROS)生成遺伝子 NoxA の機能解析	植物病理学会
	ポスター賞	ナシ黒斑病菌の貫穿菌糸における活性酸素種(ROS)生成遺伝子 NoxA の機能解析	在日本朝鮮人科学技術協会第47回学術報告会
	優秀論文発表者賞	ジオグリッドを用いた補強土の透水性に関する検討	地盤工学会
	日本食品工学会第8回年次大会優秀ポスター賞	電気インピーダンスによる発酵時のパン生地気泡の計測（第2報）	日本食品工学会
	優秀ポスター賞	電解酸化法による生乳とミルクパルパー廃水の分解特性	2007年度 磁気力制御・磁場応用 夏の学校（主催：電気学会）
	第26回日本アンドロロジー学会学会長特別賞	雄親への TCDD (2,3,7,8-tetrachlorodibenzo-p-dioxin) 曝露による次世代性比への影響ならびに TCDD 感受性と性比との関連評価	日本アンドロロジー学会
	優秀ポスター賞	Cloning and characterization of soybean GmGT-1 that binds to a light-responsive cis-element in <i>ELIP</i> promoter.	神戸大学連携創造本部
	優秀ポスター賞	果実特異的遺伝子発現機構の解析と果実を用いたタンパク質発現システムの開発	神戸大学研究基盤センター

Poster Award	Evaluation of immunomodulating actions of fucoidan in <i>Laminaria japonica</i> with a newly established coculture model of Caco-2 and RAW264.7	IcoFF2007 International Conference on Food Factors for Health Promotion
Best Poster Award	EGCG promotes translocation of glucose transporter 4 in insulin-resistant L6 myotubes	International Conference of O-CHA (Tea) Culture and Science.
優秀発表賞	プロポリス抽出物が薬物代謝酵素の発現と活性に及ぼす影響について	日本食品科学工学会関西支部
Young Investigator Award	Epigallocatechin-3-gallate stimulates translocation of glucose transporter 4 in skeletal muscle	The 3 rd International Conference on Polyphenols and Health
Poster Award	Identification of zeaxanthin as a novel antagonist of an aryl hydrocarbon receptor in <i>molokhia</i> (<i>Corchorus olitorius</i> L.)	The 4 th International Conference on Food Factors for Health Promotion
最優秀賞	植物性食品成分であるフラボノイドがダイオキシン受容体に及ぼす影響	神戸大学若手フロンティア研究会
ポスター賞（優秀賞）	水生植物ヒルムシロ属における高温ストレス順応性の比較	日本生態学会
ベストポスター賞	Locust phase polyphenism: density-dependent maternal effects on progeny size and fitness.	11 th Meeting of the International Society of Invertebrate Reproduction and Development. Smithsonian Tropical Research Institute.
Travel Award	Induction of Adaptive response through the up-regulation of GSH by γ -tocopheryl quinine	Gordon Research Conference
優秀発表賞	Foxo3a によるマウス卵母細胞の発育開始制御	日本畜産学会

《資料 37》 自然科学研究科（農学系）及び農学研究科の学生による特許取得状況》

年度	特許出願・取得件数		備考
	前期課程	後期課程	
平成 16 年度	4		国際特許 Pub. No: US2004/0055039A1
			特願 2004-150036
			特願 2004-319828
			特願 2004-154896
		2	特許第 3619833 号 特願 2004-26987
平成 17 年度	2		特願 2005-147552
			特開 2005-247822
		1	特願 2005-28384
平成 18 年度	2		特願 2006-178538
			特開 2006-129733
		1	特願 2006-224984
平成 19 年度	0	0	
合計	8	4	

観点 学業の成果に関する学生の評価

(観点に係る状況)

平成 18 年度に自然科学研究科博士課程前期課程（農学系）の学生 21 名を対象に行った修了時アンケート調査では、修了生の 85.7%が深い学識を、76.1%が高度の専門知識を習得できたと評価し、81%が課題を設定してこれを解決する能力やコミュニケーション能力を、さらに 90.5%が研究成果等を発表するプレゼンテーション能力を修得したと評価している。また、85.7%の修了生が神戸大学大学院を修了したことに満足していることから《資料 38》、教育目的とする優れた研究・教育者や高度な専門職業人の育成に合致する結果が得られている。しかし、本研究科では未だ修了生を輩出していないため、この観点に関する評価を行うことができないが、自然科学研究科と同様に修了生からの高い評価が期待される。

《資料 38：平成 18 年度自然科学研究科（農学系）修了時アンケート調査結果（抜粋）》

修了生時アンケート集計結果

「深い学識」が 2（3 または 5）年間の修士（博士前期）課程・博士後期課程において、どの程度身についたと思いますか。

1. 大いに身についた	7 名
2. どちらかといえば身についた	11 名
3. どちらともいえない	2 名
4. どちらかといえば身につかなかった	1 名
5. 全く身につかなかった	0 名

「高度の専門知識」が 2（3 または 5）年間の修士（博士前期）課程・博士後期課程において、どの程度身についたと思いますか。

1. 大いに身についた	3 名
2. どちらかといえば身についた	13 名
3. どちらともいえない	4 名
4. どちらかといえば身につかなかった	1 名
5. 全く身につかなかった	0 名

「課題を設定し解決していく能力」が 2（3 または 5）年間の修士（博士前期）課程・博士後期課程において、どの程度身についたと思いますか。

1. 大いに身についた	6 名
2. どちらかといえば身についた	11 名
3. どちらともいえない	3 名
4. どちらかといえば身につかなかった	1 名
5. 全く身につかなかった	0 名

「コミュニケーション能力」が 2（3 または 5）年間の修士（博士前期）課程・博士後期課程において、どの程度身についたと思いますか。

1. 大いに身についた	3 名
2. どちらかといえば身についた	14 名
3. どちらともいえない	3 名
4. どちらかといえば身につかなかった	1 名
5. 全く身につかなかった	0 名

「プレゼンテーション能力」が 2（3 または 5）年間の修士（博士前期）課程・博士後期課程において、どの程度身についたと思いますか。

1. 大いに身についた	7 名
2. どちらかといえば身についた	12 名
3. どちらともいえない	2 名
4. どちらかといえば身につかなかった	0 名
5. 全く身につかなかった	0 名

全体的に、あなたは神戸大学大学院を修了することに満足していますか。

1. 大いに満足している	10 名
2. どちらかといえば満足している	8 名
3. どちらともいえない	0 名
4. どちらかといえば満足していない	3 名
5. 全く満足していない	0 名

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を大きく上回る。

(判断理由)

自然科学研究科（農学系）の前期課程・後期課程における修了状況や、学位論文に関わる学会等で多くの発表と公表論文数及びこれらの成果に対する関連学会からの多くの受賞等、さらに修了生からの在学中に受けた教育に対する高い評価から判断して、同研究科の教育目的に照らし、十分な教育の成果が上がっていると言える。

よって、学業の成果は期待される水準を大きく上回っていると判断する。

分析項目 V 進路・就職の状況

(1) 観点ごとの分析

観点 卒業(修了)後の進路の状況

(観点に係る状況)

自然科学研究科前期課程(農学系)における就職希望者に対する就職率は100%であり、非常に高い割合で研究・技術者を輩出している《資料39》。また、後期課程においても半数以上が研究・技術職に就職しており、この傾向はここ数年安定している《資料40》。

また、農学研究科博士課程前期課程では、自然科学研究科同課程に引き続き、高等学校教諭専修免許(農業)を取得でき、この専修免許状を取得できる資格を有する修了生を若干名輩出してきている《資料41》。

《資料39：自然科学研究科(農学系)の博士課程前期課程における修了者の進路状況(平成14~19年度)》

年度	専攻名	修了者数	進学者数				進学率	就職希望者数	就職者数					就職率	その他	
			大学院		その他	計			大学教員・研究機関		官公庁	民間企業等				計
			自大学	他大学					国立	私立		技術	事務			
14	応用動物学	21(1)	3			3	14%	15		1	1	10	3	15	71%	3(1)
	植物資源学	23(2)	2(2)			2(2)	9%	18	2		1	14	1	18	78%	3
	生物環境制御学	23	4			4	17%	15				13	2	15	65%	4
	生物機能化学	25(1)	3(1)			3(1)	12%	19		2		16	1	19	76%	3
	食料生産環境工学	10	1			1	10%	9		1	3	5		9	90%	0
	計	102(4)	13(3)			13(3)	13%	76	2	4	5	58	7	76	75%	13(1)
15	応用動物学	22(3)	5(2)	1		6(2)	27%	13	1			12		13	59%	3(1)
	植物資源学	19(4)	6(2)			6(2)	32%	9	1			6	2	9	47%	4(2)
	生物環境制御学	30(1)	2(1)	1		3(1)	10%	25			4	19	2	25	83%	2
	生物機能化学	22(1)	1(1)			1(1)	5%	19	1		1	16	1	19	86%	2
	食料生産環境工学	20	2			2	10%	18	1	1	4	11	1	18	90%	
	計	113(9)	16(6)	2		18(6)	16%	84	4	1	9	64	6	84	74%	11(3)
16	応用動物学	25(1)	2(1)			2(1)	8%	22	1		2	16	3	22	88%	1
	植物資源学	15(2)	3(2)			3(2)	20%	11	1			8	2	11	73%	1
	生物環境制御学	38(5)	8(5)			8(5)	21%	28	1		1	23	3	28	74%	2
	生物機能化学	26	5			5	19%	18		1		14	3	18	69%	3
	食料生産環境工学	21(2)	4(1)			4(1)	19%	16(1)			3	7(1)	6	16(1)	76%	1
	計	125(10)	22(9)			22(9)	18%	95(1)	3	1	6	68(1)	17	95(1)	76%	8
17	応用動物学	24(3)	5(3)	1		6(3)	25%	18				16	2	18	75%	
	植物資源学	19	1			1	5%	15	1	1		9	4	15	79%	3
	生物環境制御学	25(1)	6(1)	1		7(1)	28%	17				15	2	17	68%	1
	生物機能化学	35(5)	2(1)			2(1)	6%	30(3)		2		28(3)		30(3)	86%	3(1)
	食料生産環境工学	16(2)					0%	15(1)			1	14(1)		15(1)	94%	1(1)
	計	119(11)	14(5)	2		16(5)	13%	95(4)	1	3	1	82(4)	8	95(4)	80%	8(2)
18	応用動物学	25(1)	5(1)			5(1)	20%	20				17	3	20	80%	1
	植物資源学	28(4)	2(2)		1	3(2)	11%	24(1)			5	11(1)	8	24(1)	86%	1(1)
	生物環境制御学	28(5)	6(2)			6(2)	21%	17(1)			1	14(1)	2	17(1)	61%	5(2)
	生物機能化学	24(3)	2(1)			2(1)	8%	20(1)		1(1)		18	1	20(1)	83%	2(1)
	食料生産環境工学	13(1)	1(1)			1(1)	8%	11			1	10		11	85%	1
	計	118(14)	16(7)		1	18(6)	15%	92(3)		1(1)	7	70(2)	14	92(3)	78%	10(4)
19	応用動物学	22(5)	6(2)			6(2)	27%	16(1)				13(1)	3	16(1)	73%	2(2)
	植物資源学	30(3)	2(2)		1	3(2)	10%	23			5	14	4	23	77%	4(1)
	生物環境制御学	24	2			2	8%	19			2	13	4	19	79%	3
	生物機能化学	30	1			1	3%	29				28	1	29	97%	
	食料生産環境工学	16(2)	1(1)			1(1)	6%	13(1)			3	6	4(1)	13(1)	81%	2
	計	122(10)	12(5)		1	13(5)	11%	100(2)			10	74(1)	16(1)	100(1)	82%	11(3)

平成18年度及び19年度の応用動物学専攻の修了生で就職し且つ進学した者を各々1名と2名を含む

《資料 40：自然科学研究科博士課程後期課程（農学系）における修了生の就職状況》

年度	修了者数	研究・技術関係	その他
平成 16 年度	25	14	11
平成 17 年度	25	13	12
平成 18 年度	21	18	3
平成 19 年度	18	13	5
合計	89	58	31

《資料 41：神戸大学大学院農学研究科規則抜粋（平成 19 年 4 月 1 日制定）》

（教員の免許状授与の所要資格の取得）

第 39 条 研究科において、教員の免許状授与の所要資格の取得しようとする者は、教育職員免許法（昭和 24 年法律第 147 号）及び教育職員免許法施行規則（昭和 29 年文部省令第 26 号）に定める所定の単位を修得しなければならない。

2. 前期課程において、所要資格を取得できる教員免許状の種類及び免許教科は、別表第 4 のとおりとする。

別表第 4

専攻	教育職員免許状の種類	免許科目
食料共生システム学専攻	高等学校教諭専修免許状	農 業
資源生命科学専攻		
生命機能科学専攻		

観点 関係者からの評価

（観点に係る状況）

平成 19 年度に自然科学研究科前期課程・後期課程（農学系）の修了生を受け入れた企業等の関係者を対象に行った「修了者の学力や資質・能力に関するアンケート調査」では、専門知識については就職先の関係者の 78.2%が、一般常識については 92.7%，論理的思考能力については 90.9%，社会人としての適性については 92.7%が修了生を相対的に高く評価している《資料 42》。

同様に前期課程・後期課程（農学系）の修了生に対するアンケート調査では、84.9%の修了生が在学時の研究や教育の内容を高く評価している。また、研究を通じて体得した観察力についても 90.6%，講義から得られた基礎的な学力については 73.6%，研究によって培われた論理的な思考能力については 81.1%，講義の先端性については 62.7%，学生実験・実習を通じて得られた基礎的な学力・技術力については 63.5%，研究活動を通じて得られたプレゼンテーション能力については 73.6%の修了生が高く評価しており、教育目的である優れた研究・教育者や高度な専門職業人の育成に合致する結果が得られている《資料 43》。

また、前述（「観点 学生が身に付けた学力や資質・能力」）のように、本研究科の関係する学術団体から学生が行った学会発表や公表論文に対する高い評価を得ている。

《資料 42：平成 19 年度自然科学研究科（農学系）の修了生の就職先関係者に対するアンケート調査結果（抜粋）》

就職先へのアンケート集計

1. 学力について

1) 専門知識についてどのように評価されていますか。

1. 高く評価できる	12 名
2. どちらかというと高く評価できる	31 名
3. どちらかというと評価できない	7 名
4. 明らかに評価できない	0 名

2) 一般常識についてどのように評価されていますか。

1. 高く評価できる	15 名
2. どちらかというと高く評価できる	36 名
3. どちらかというと評価できない	2 名
4. 明らかに評価できない	0 名

2. 論理的思考能力について

1) 論理的思考力についてどのように評価されていますか。

1. 高く評価できる	22 名
2. どちらかというと高く評価できる	27 名
3. どちらかというと評価できない	5 名
4. 明らかに評価できない	0 名

3. 社会人としての適性について

1) 社会人としての適性についてどのように評価されていますか。

1. 高く評価できる	21 名
2. どちらかというと高く評価できる	29 名
3. どちらかというと評価できない	3 名
4. 明らかに評価できない	0 名

《資料 43：平成 19 年度自然科学研究科（農学系）の修了生に対するアンケート調査結果（抜粋）》

修了生へのアンケート集計結果

I. 全体評価

卒業・修了して社会人として活動されている現在、かつてご自身が受けられた農学部・自然科学研究科（農学系）での教育・研究を振り返った際に、その内容について全体的にどのように感じられていますか。

1. 高く評価できる	9 名
2. どちらかという人评价できる	36 名
3. どちらかという人评价できない	8 名
4. 明らかに評価できない	0 名

II. 個別評価

2) 学部・研究科で受けた講義によって培われた基礎的な学力について、社会に出てからどのように感じていますか。

1. 高く評価できる	5 名
2. どちらかという人评价できる	34 名
3. どちらかという人评价できない	14 名
4. 明らかに評価できない	0 名

3) 学部・研究科で受けた講義の先端性について、社会に出てからどのように評価していますか

1. 高く評価できる	4 名
2. どちらかという人评价できる	28 名
3. どちらかという人评价できない	18 名
4. 明らかに評価できない	1 名

4) 学生実験・実習等を通じて得られた基礎的な学力・技術力について、社会に出てからどのように評価していますか。

1. 高く評価できる	7 名
2. どちらかという人评价できる	26 名
3. どちらかという人评价できない	19 名
4. 明らかに評価できない	0 名

5) 卒業研究や大学院での研究等を通じて体得された観察力は、社会に出てから役に立っていると評価できますか。

1. 大変役立っている	24 名
2. どちらかというと役立っている	24 名
3. どちらかというと役立っていない	5 名
4. ほとんど役立っていない	0 名

6) 卒業研究や大学院での研究等を通じて培われた論理的な思考能力は、社会に出てから役に立っていると評価できますか。

1. 大変役立っている	20 名
2. どちらかというと役立っている	23 名
3. どちらかというと役立っていない	9 名
4. ほとんど役立っていない	1 名

7) 卒業研究や大学院での研究等を通じて得られたプレゼンテーション能力は、社会に出てから役に立ちましたか。

1. 大変役立っている	19 名
2. どちらかというと役立っている	20 名
3. どちらかというと役立っていない	12 名
4. ほとんど役立っていない	2 名

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由)

自然科学研究科（農学系）における学位取得者の高い就職率及び研究・技術職への高い就職率は、修了生が社会から高い評価を受けていることの表れであり、教育目的に沿った成果が上がっていると考えられる。また、就職先等の関係者からの高い評価を頂いていることから、同研究科の教育目的に沿った教育の成果や効果が上がっていると考えられる。

以上のことから、進路・就職の状況は期待される水準を上回っていると判断する。

Ⅲ 質の向上度の判断

①事例1「教育・研究の実施体制の再構築」(分析項目Ⅰ)

(質の向上があったと判断する取組)

本研究科では、博士課程前期課程・後期課程における教育課程の組織的展開を強化し、教育プログラムの系統的な展開を図るとともに、先端的研究を推進するために自然科学研究科を学問系列毎に改組し、農学の理念である「持続共生の科学」に基づいた「食料・環境・健康」に関わる諸問題を専門的かつ総合的に教育研究できるように教育の実施体制を再構築するなど、食料・環境・健康に根ざした農学研究の拠点として様々な社会からの要請に応えうる体制を構築した。

②事例2「教育研究の国際化」(分析項目Ⅱ)

(質の向上があったと判断する取組)

本研究科では、平成17年度に採択された文部科学省の大学教育の国際化プログラム「アジア農業戦略に資する国際連携教育」を大学院教育に取り入れ、さらに平成19年度グローバルCOEプログラムの採択に伴い、「膜生物学リサーチリーダー育成コース」を設置するとともに、平成19年度採択の若手研究者インターナショナル・トレーニングプログラム「食糧危機に備え資源保全をEUに学びアジアに活かす国際農業戦略の実践トレーニング」を大学院教育に取り入れている。加えて国費外国人留学生(研究留学生)の優先配置を行う特別プログラムの採択に伴い、「食の安全安心科学を学ぶ」英語特別コースを設けるとともに、JICAプログラムへ学生を参加させることにより、大学院教育の国際化を一層推進しており、国際的視野に立って活躍する研究者の育成を効率的に行える体制を構築したことによってアジアを中心とした国際社会から大きな期待が寄せられている。

③事例3「教育方法の積極的工夫」(分析項目Ⅲ)

(質の向上があったと判断する取組)

21世紀COEプログラム、グローバルCOEへ学生を積極的に参加させるとともに、研究科独自のRAへの学生の採用により、学生の研究能力の向上を図った。また、他研究機関への研究指導委託を実施して学生の研究能力の向上や技術修得を図るとともに、研究指導の体制を改め、複数の指導教員による指導体制をとることによって指導体制を確実にしており、このような教育方法の積極的工夫は、修了時における学生からの教育に対する高い評価や在学時の多くの論文公表や学会発表、さらにはこれらの業績に対する学術団体からの高い評価に表れており、加えて修了生の高い就職率、特に研究・技術職への高い就職率や、就職先関係者からの修了生の資質に対する高い評価及び修了生からの教育に対する高い評価にも表れている。